激動の世界で緑を守ることこそ祖国の防衛

全国山村振興連盟事務局長　實重重実

２０１２年、今から１０年前に出た生態学の教科書 「Principle of Life」（デイヴィッド・Ｍ・ヒリス他著）の中で、 地球人口は過剰であり、意図的に人口減少を実現できなければ、という前提で、次のように述べています。「黙示録の馬に乗った騎士（戦争・飢饉・疫病など）が死亡率を増加させることによって、維持可能な人口サイズにまで減少させるだろう。」（アメリカ版大学生物学の教科書第５巻生態学・２０１４年講談社）

この文章を初めて読んだとき、生態学者というのはなんとシニカルにものを言うのだろうと思いました。戦争・飢饉・疫病などが人口を減少させるなどと直截的に言うことには、人道的・倫理的な面から批判が出るようにも感じました。

しかしそれから１０年経って、ここ２～３年のうちに起こっていることはどうでしょうか。疫病・災害・戦争。まさにこの生態学の本で「黙示録の騎士」と書かれていたような 巨大な厄災が世界全体に降りかかっているのが現状ではないでしょうか。

ウクライナは地政学的に重要な位置にあり、だからこそ歴史を通じて侵略者によって支配されてきた悲惨な歴史があります。しかしそれは地理的な位置だけでなく、土壌が世界でも例外的なほど豊穣で、生産力が豊かであったことにも影響されていると考えられます。

世界の土壌は大きく１２分類されますが、そのうち肥沃土とされているものは ３種類しかありません。第１は、ウクライナや北米の草原プレーリーに広がる黒土で、チェルノーゼムとも言われます。麦などの穀倉地帯であり、これらが陸地の７%を占めています。２番目は、「ひび割れ粘土質土壌」と言われる粘土が多い土壌で、畑作や牧草の輪作に適しています。インド・エチオピアにあり、これが陸地の２%を占めています。３番目は、日本の黒ボク土で、火山灰土壌であり、陸地の１%未満に過ぎません。世界の３つの肥沃度を合わせても、陸地の１０%程度に過ぎず、残りの９０%は、砂漠・永久凍土・泥炭土などなのです。大地に広がるのは動植物を豊かには育てられない土壌だと言うことになります。

中国や朝鮮半島の土壌についても、一旦木を伐採するとなかなか元に戻らないで、禿げ山になったままなのだそうです。これに対して日本では３０年で森林が再生するので、順番に伐採して、火を起こして鉄を作り、鉄から農具・建築用具が作られて、日本文化ができていったということです。

このように世界で例外的なほど豊かな土壌の上に住んでいるにも関わらず、島国であったおかげで、日本は幸いにして外来勢力の侵略から免れてきました。 しかし、ウクライナの現状は、他人事ではありません。

そして疫病・災害・戦争によって激変してしまった世界だからこそ、私たちは 祖国の豊かな緑・森林・土壌を懸命に守っていかなければならないのだと思います。食料・環境を生み出す生態系を循環させ、守ることは、 激変する世界の中にあって、祖国を守り、人々を守り、そして世界全体にも貢献することなのだと言わなければならないでしょう。